

高校生の学校生活に関する意識調査

——日本とニュージーランドの比較——

林 孝 夫

現代の青年は勉強に追いまくれ、青年期と呼ばれている大切な時期を浪費してしまっているのではないだろうか。また、学校においては、友人関係や学業不振による不登校が増加しつつある。以上を踏まえ、青年期にある高校生の意識を探り、彼らはどういう青年期を過ごしているのかを理解し、少しでも心豊かな、夢のある学校生活を送る一助になればと考え、この意識調査を実施することにした。調査においては、「学校生活は充実していて楽しいですか」を初めとした学校生活の充実度を尋ねる設問を用意し、初めに日本の高校で意識調査を実施した。その結果を分析し、考察を行った後、ニュージーランドの高校生に対しても同様の調査を実施し、両国の高校生の意識についての共通点、相違点を見つけだそうとした。

キーワード：学校生活、友人、ゆとり

は じ め に

読賣新聞 1995 年 8 月 11 日号に文部省の学校基本調査の報告として、「学校嫌い」を理由に年間 30 日以上欠席した不登校（登校拒否）の児童・生徒数が前年より 3.5% 増加し、過去最高の 7 万 7000 人を記録し、特に中学校では一校に 5 人前後の深刻な「学校嫌い」の生徒がおり、その原因の 4 割は友人関係や学業不振などの学校生活にあると報じられていた。

それでは、当の生徒達は学校に対してどのような意識を持っているのだろうか、何が彼らを学校嫌いに行っているのかを考える一助としてこの意識調査を実施した。この意識調査では高校生に小学校から高校までの学校に対する考えを答えてもらい、この結果をもとに少しでも生徒にとって快適な学校、夢が持て

る学校にするにはどのようにすればよいかを考えていきたいと思う。

1 日本の高校生の学校意識調査

ここでは、高校生に実施した意識調査をもとに、現在の高校生の意識や彼らが置かれた状況を見てみようと思う。その上で、生徒のライフサイクルを考えた、生徒にとって本当に必要な学校とはどのようなものかを考えていこうと思っている。

1, 調査方法, 時期, 人数

本研究では、高校生の生活実態と意識を探るために、質問紙による調査を無記名で行った。上記目的のために、学校生活への満足度、教師との関係等4

(資料1) 意識調査の用紙

(年) (男, 女)

1, 学校生活は充実していて楽しいですか。

1, はい 2, いいえ

①1と答えた人はどういうところが楽しいか、具体的に書いてください

②2と答えた人はどうすれば充実した楽しい学校生活になると思うか、具体的に書いてください。

2, 小・中・高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか、いずれかに○をつけてください。

小・中・高

①また、それはどうしてか理由を書いてください。

3, 今までに信頼できる先生がいましたか。

1, はい 2, いいえ

①1と答えた人それは小・中・高いずれの時ですか。()

②どのような点が信頼できたのか、具体的に書いてください。

4, 学校に行きたくないと思ったことがありますか。

1, はい 2, いいえ

①1と答えた人、それはいつ頃ですか。()

②どのようなことが原因でしたか、もしわかれればその理由を具体的に書いて下さい。

項目を設定した。時期は 1993 年 10 月から 1994 年 5 月にかけて、大阪府下、京都府下、滋賀県下のそれぞれの高校で行った。アンケート総数は男子 159 人、女子 111 人、合計 270 人であり、回収率は 100% である。

2, 調 査 結 果

次ぎに各質問項目に対する回答について特徴的な点について見ていきたいと思う。(結果については 2 章を参照)

(a) 「学校生活は充実していて楽しいですか」

この質問に対する回答を見ていくと、全体としては 270 人中 185 人 (68.5 %) が「はい」と回答し、過半数を上回っており、特に女子では 72.1% と高く、大部分の生徒が「高校生活を大いに楽しんでいる」ことがわかる。

それでは、次ぎに生徒が「何を楽しみに学校にきているのだろうか。」

それは、次の質問①の「どういうところが楽しいか」の回答に見られるように男女共「友人と遊ぶ」が圧倒的な数値で 1 位に挙げられている。次いで「クラブ活動」である。従来より、教育本来の目的、機能とされてきた「勉強」、「先生」といった項目は下位の方にしか出てこない。このことから、＜高校生は学校生活それ自体は楽しいがそれは本来の目的とされる学習内容等が興味深いからではなく、友人と遊ぶことが楽しいからである＞ということが言えるのではないだろうか。ここに現在の学校が抱えている問題点があるのではないだろうか。＜生徒のライフサイクルに合わせた学校作り＞、＜生徒のニーズに合わせた学校作り＞といったものが必要になってくるのではないだろうか。

この点については、質問②の「どうすれば充実した楽しい学校生活になると思いますか」でさらに強化されるのではないだろうか。回答に見られる「自由がほしい」「自由にする」は＜現在の学校が生徒のニーズを満たしていない＞ということを物語っているであろう。さらに「学校がおもしろくない」「勉強をなくす」という回答についても生徒の身勝手な意見と一笑に付するのではなく、生徒の真剣な訴えとしてとらえ、このような回答が少しでも減るように、教育内容を検討する必要があるのではないだろうか。従来から＜勉強とは苦し

いものだ、苦しくてもやり抜くから身につくのだ」という根強い意見があるが、筆者は「勉強とは本来楽しいものだ、楽しく学べないものは間違っている」と考えており、その考え方に沿って学校教育のあり方を今後考えていきたいと思う。

回答の中には「何かに打ち込めるものを見つける」「積極的な性格が必要である」等の「学校生活が楽しくないのは自分の責任である」と考えているものも見られる。しかし、これとて「生徒のニーズを満たした」授業や教育内容が整備されれば解決するのではないかと筆者は考える。生徒のライフサイクル、ニーズを考えた新しい学校作りが求められているのではないだろうか。

(b) 「小・中・高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか」

ここでは、調査結果を参考に生徒にとって本当に楽しい学校、意義ある学校とはどうあるべきか、また、どういう学校が生徒のライフサイクルから見て適切であるかを考えてみようと思う。

結果を見ると全体としては、「小学校時代」と回答したものが、270人中46人（17%）、「中学校時代」は130人（48.1%）、「高校時代」は88人（32.6%）で「中学校時代」が圧倒的に多くなっている。筆者は、この調査を実施する前に「高校時代」という回答が多くなるのではないかという予測を立てていたが、結果は予想を覆して「中学校時代」が最も多くなってしまった。なぜ、このような結果が出てきたのかを筆者がこの意識調査と併せて実施した聞き取り調査を参考に考えていきたいと思う。

聞き取り調査の中で出てきた意見は次の通りである。「中学校時代には将来の夢を持つことができたが、今はそれができない、現実を知ってしまったからという訳ではないのだが」「勉強に関しては高校よりも中学の方がやさしかったし、中学校の時は勉強しろとは言われなかった」「授業時間も高校の方が長く、しんどい」「今は誰でも高校に入学できて当たり前で、高校進学がプレッシャーになることはない、しかし、高校に入学してしまうと自分の将来が見えてしまう（どれくらいの大学に入って、どれくらいの会社に入れるかということ）、中学校の時はそのようなことを考えなくてよかったので楽しかった」「ク

ラスについては中学校の方が団結力があり、男女の仲はよかったが、高校はクラスが盛り上がらない、友人関係は中学校の方が小学校より続いているので安心できる」「中学校時代の方が多くの友人がいたが、高校ではばらばらになってしまった」「中学校では先生がおもしろかったし、若かった、また、中学校では何をやってもよかった」「クラブ活動は高校の方がきつい」以上は「中学校が一番楽しかった」と回答した生徒の意見である。また、校則の厳しさについては「中学校の方が厳しい」と回答した生徒が大部分だった。

筆者は、最初に述べたように＜中学校時代は高校受験が目前にあり、内申書等で縛られて自由がないので、「高校時代」と回答する生徒が多くなる＞と予想していたが、その予想は外れ、むしろ、今の高校生の方が入学当初から進学、就職のコース分けがおこなわれ、高校の方が＜進路にプレッシャーを感じる＞状況に置かれていることがわかる。逆に中学校では、いろいろな取り組みができ、その結果、クラスの団結も高まり、教師との関係もよくなり、校則が厳しくとも、「中学時代の方が楽しかった」ということができたのであろう。

最後に男子生徒が述べているように、高校間格差が助長され、どこの高校に入学するかで生徒の将来が見えてしまい、生徒の夢を奪っているいわゆる＜学力偏重社会も高校生活を楽しくないもの＞にしている一因であろう。この＜高校生が人生に夢が持てなくなってしまった状況＞を打ち破り、楽しく充実した高校生活を送れるようにしたいものである。

次に質問①の「どうしてか」を見ていき、生徒が各時期における学校をそれぞれどのようにとらえているのか考えてみたい。

「小学校時代（が一番楽しかった）」を選択した生徒の回答を見ていくと「おもしろかった」「何事も積極的だった」「何も考えずに行動できた」「勉強しなくてもよかった」「テストを真剣にしなくてもよかった」等の意見が見られた。ここからは、生徒が伸び伸びと学校生活を楽しんでいる姿が浮かび上がってくる。勉強よりも遊びを通して人生に必要な基礎を学んでいっている姿が見えてくる。＜学校とはただ勉強するだけの場でない、人生の基礎を作るところだ＞という教育本来の姿が見えてくる。そこには生徒を無理矢理押さえつけようとする姿はなく、また、生徒も将来に対する夢を持つことができ、毎日が夢のあ

る日々であっただろうと想像できる。それが、中学校に進むと、「勉強」「進路」ということが現実には迫ってきて、生徒に有形無形のプレッシャーをかけるのだろう。しかし、中学校においては、筆者がすでに述べたように、まだ進路や将来に対して夢を持つことができる時期であり、クラスの仲間とのさまざまな楽しい取り組みが、校則は厳しいかもしれないが、それ以上に学校生活に夢を持つことができるのであろう。だからこそ、筆者の調査にも見られるように「中学校時代」が一番楽しい時期であったのであろう。

それが高校に入学するとまず、＜学校とは勉強する所＞という意識が一層強くなり、また、高校自体も大学への進学実績のみで＜あの学校は進学校だ、よい学校だ＞といったように高校の評価が決められてしまう、そのような状況の中で筆者の聞き取り調査に見られたように、将来に対する絶望感、進路に対する不安感が一層高まり、生徒はそれから逃れるために友人へと走っていつてしまうのであろう。また、授業内容の難しさも＜授業離れ＞へと拍車をかけるのであろう。このような状況の中で友人関係がくずれると生徒は不登校、退学へと進んでいくのであろう。

それでは、どのような学校が生徒にとって理想の学校であろうか。それは、筆者の調査で見られた生徒の回答の中からも十分読み取ることができるのではないだろうか。筆者は、生徒の回答を見ながら、生徒の考える理想の学校を次のように整理してみた。

【理想の学校】

〔小学校〕 おもいっきり、自由に遊ぶことができる

〔中学校〕 友人が多くいる。自由があり、充実している。クラブ活動が楽しめる。クラス全員で文化祭や体育祭等、何でも取り組むことができる。きまりはあるが、その中でいろいろできる。授業がやさしく、未来のことを考えなくてもよい。テストもやさしい。

〔高校〕 原級留置や退学、停学がない。自由があり、縛られた雰囲気がない。大人として認められる。アルバイトもできる。広い範囲の友人ができる。クラブ活動が楽しい。将来へのプレッシャーがない。（どこの高校に入学するかで人生が決まることがない）

(c)「今までに信頼できる先生がいましたか」

筆者は (a) の「学校生活は充実していて楽しいですか」に対する分析の中で「友人がいるから学校が楽しいのであり、この関係がくずれてしまえば、学校は全く楽しくなくなってしまう」と述べてきたが、ここでは「信頼できる先生がいることが学校生活を楽しむ上で大切な要因になっているのではない」という考えに立って回答を見ていきたいと思う。

「今までに信頼できる先生がいましたか」というこの質問に「はい」と回答したのは、全体で 270 人中 149 人 (55.2%) である。これで見ると、何と 2 人に 1 人程度しか信頼できる先生がいなかったことになる。半数近くの生徒は信頼できる先生もなく、小学校、中学校、高校と学校生活を送っていることになる。ただ、黙々と学校に来て、授業を受けている生徒の姿を想像すると何かやりきれなくなってしまう。このような状況の中で、「友人」がいれば、まだ救われるが、「友人」もいなければ、「学校が楽しくない」と考えるのも当然のように思われる。

次に質問①の「(それは) 小, 中, 高のいずれの時ですか」について見ていきたいと思う。全体で見ると「小学校時代」が 39 人 (26.2%), 「中学校時代」が 87 人 (58.4%), 「高校時代」が 38 人 (25.2%) となり、「中学校時代」に「信頼できる先生」が多くいたことになる。これは、(b) の「どの時代が一番楽しかったか」という質問に対し、「中学校時代」と回答した生徒が多かったことと一致する。

このことから考えても「信頼できる先生が数多くいることが学校生活を楽しむための大切な条件である」と言える。特に、初期青年期（ブロス 1962 年）¹⁾を迎えるこの中学校時代に信頼できる先生に数多く出会えるということは、生徒の一生涯にわたる人間形成にとって非常に意義深いものであると言える。＜小学校、高校時代においても中学校時代と同じぐらいの数の信頼できる先生がいれば＞と考えると残念でならない。

次に質問②の「どういう点が信頼できたのか」という質問に対する回答を見ながら、生徒が理想とする先生像を探っていくと共に、なぜ中学校時代に信頼できる先生が多くいたのかを考えてみたい。先生像として浮かび上がってくる

のは、特に中学校では「何でも話せた」「同じ立場で物事を考えてくれた」「相談に乗ってくれた」「最後まで進路を考えてくれた」「頼りがいのある先生だから」というものである。これらのことをまとめると理想の教師像として、次のことが浮かび上がってくる。＜生徒の気持ちを理解し、適切に生徒にアドバイスを与えてくれ、真剣に進路等の面倒をみてくれる＞という教師像である。このことは「初期青年期を迎え、第2次性徴の発現に伴い、親から心理的な距離を置き始めた」（プロス 1962）²⁾彼らが、中学校の教師に理想の父親像、母親像を見いだそうとしたのではないかと考えられる。中学校を舞台とした金八先生（「3年B組金八先生 東京放送」）が大ヒットしたのは、まさにこの教師像が金八先生そのものであったから、中学生の共感を呼んだのだろうと考えられる。＜どの小学校、中学校、高校においても、それぞれの生徒にとっての金八先生がいれば＞と願ってやまない。そうすれば、「学校に行きたくない」と考える生徒も減少するだろうし、教師とさらに友人の力により、思春期も乗り越えられるのではないだろうか。そうして、青年期における自我同一性も確立でき、生涯の発達の基礎を身につけることができるのではないかと考える。それぞれの生徒にとって理想の教師であるというのは教師にとってとても大変なことである。それを実現するためには、教師自身がゆとりを持って一人一人の生徒に向かって実践できるような環境作りが不可欠になってくるであろう。最後に＜信頼できる先生がいれば学校生活はさらに充実した楽しいものになるであろう＞ということをつけ加えておきたい。

(d) 「学校に行きたくないと思ったことがありますか」

ここでは「学校に行きたくないと思ったことがありますか」という質問に対する回答を参考に、今の生徒の学校に対する思いを見ていき、どのようなことが原因で学校に行く気がなくなっているのかを考えていこうと思う。

「はい」と回答した生徒は全体としては、270人中157人（58.1%）であり、特に女子が73.9%と高い割合を示している。これらのことから考えると、いかに多くの生徒が「学校に行きたくない」と感じているのか理解することは容易であろう。そして、学校も生徒にとって魅力のある存在になっていないの

ではないかと言えるのかもしれない。この問題を少しでも解決するためには今までの6, 3, 3, 4年制という短いスパンで考えるのではなく、生徒の一生涯から見た学校作りが必要となってくるのではないだろうか。

次に質問①の「いつの頃に（学校に行きたくないと思ったか）」では、全体として見ると、「中学校時代」「高校時代」が多く、「いつも」という回答も多く見られる。中には、男子で「小学校時代」という回答も見られ、小学校の頃からすでに「学校に行きたくない」と考え始めていることがわかる。では次に「何が原因か」を見ていきたいと思う。その原因としては、「だるいから」「疲れたから」という回答が多く見られ、また、「学校がおもしろくないから」というように「学校」そのものが原因になっているものも見られる。もちろん、(a)の「学校は充実していて楽しいですか」でその楽しい理由の第1位として挙げられていた「友人がいる」が今度は逆にその友人関係がくずれ、「学校に行きたくない」大きな原因になっている場合もある。そして、学校が興味あるものになっていないから、朝になると精神的なものから身体がだるくなり、学校に行きたくなくなるのではないだろうか。また、友人を作ることによってかろうじて、生徒を学校へと向かわせているものが、友人関係が一度くずれてしまえば、もう生徒を学校へと向かわせる動機が何一つ残されていない状況に追い込まれてしまうのだろう。生徒にとって真に魅力ある学校、理想の学校というものをもう一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

2 日本の高校生とニュージーランドの高校生に対する意識調査による比較研究

昨今、日本の学校においては、進学競争はもちろんのことであるが、それ以外にもいじめが深刻な社会問題となり、毎日のように新聞等で報道されている。また不登校の生徒も増加している、この原因を探るべく1章では、日本の高校生に焦点を当てて、高校生の学校に対する意識を筆者なりに、分析してきたが、本章では、日本の高校生とニュージーランドの高校生の意識を比較することにより、両国の高校生の置かれた状況、学校教育の現状やまた今後どう

あるべきかについて考察していくことにする。高校生の意識を調べるために、日本とニュージーランドの高校生への意識調査を行った。調査時期は、日本の高校生については、1993年10月から1994年5月にかけて、京都府下、大阪府下、滋賀県下のそれぞれの高校で行った。アンケート総数は、男子159人、女子111人、合計270人である。また、ニュージーランドでは、首都ウェリントン市内の男子高校生と女子高校生45人に対し1995年6月に回答を求めた。その内訳は男子21人、女子24人である。質問内容については日本語、英語という違いがあるが全く同様である。両グループには人数の面で差はあるが、両国の比較をしてみたいと思う。

(a) 学校生活の充実度に関して

「学校生活は充実していて楽しいですか」という質問に対して、「はい」「いいえ」で回答してもらい、「はい」と回答した生徒に対しては、「何が楽しいですか」、「いいえ」と回答した生徒に対しては、「どうすれば楽しくなりますか」というそれぞれの質問に対して記述式で回答してもらった。

《学校生活は充実していて楽しいですか》

日本の高校生の方が充実度は高い。最初、日本の高校生の回答を集計した段階では、全体での充実度が70%弱であったことに対して、筆者はく低いのではないかと>という印象を持ったが、両国を比較してみると決して低い数字ではないことがわかった。調査前の筆者の予想では、ニュージーランドの方が高くなるのではないかと考えていたが、意外であった。もっともこれは、サンプル

(資料2) 日本の3校アンケート集計結果

男子159人 女子111人 合計270人

質問1, 「学校生活は充実していて楽しいですか」

	全 体	男 子	女 子
は い	185 (68.5)	105 (66.0)	80 (72.1)
いいえ	77 (28.5)	50 (31.5)	27 (24.3)
無回答	8 (3.0)	4 (2.5)	4 (3.6)

(注) () 内の数字は%を示している。

高校生の学校生活に関する意識調査（林）

ニュージーランドウエリントン市のアンケート集計結果

男子 21 人，女子 24 人，合計 45 人

質問 1「学校生活は充実していて楽しいですか」

	全 体	男 子	女 子
は い	26 (57.8)	9 (42.9)	17 (70.8)
いいえ	19 (42.2)	12 (57.1)	7 (29.2)

(注) () 内の数字は%を示している。

数が少ないのと高校も限定されていることも原因しているのかもしれない。しかし、両国とも半数以上が「満足」しており、特に両国とも女子に関しては 70 %を超える満足度を示していることは注目に値する。このことは、日本においては、いじめや不登校といった最近の諸問題に対し、今後学校が十分に機能する力があることを示しているのではないだろうか。問題はどのように機能させていくかではないだろうか。

《何が楽しいですか》

両国とも「友人」と「クラブ活動」が上位にきている。「クラブ活動」も友人をつくる一つの方法だと考えると「友人」が学校生活を楽しむための大きな鍵を握っているといえる。

《どうすれば楽しくなりますか》

日本では「友人をつくる」が多く、上記の質問に対する回答と合わせ、＜友人がいることが学校を楽しむための条件であり、友人が学校生活を支えている＞といっても過言ではないだろう。

ニュージーランドでは、授業に関する要求が多く、学校生活を楽しむためには、友人同様、授業の内容が生徒を学校に引き付けるかどうかの鍵になっていると言える。

両国に共通しているのは、「自由にする」が数多く見られることである。校則が双方の生徒の学校生活を窮屈なものにしているのであろうか。興味深い内容である。

①「はい」と答えた人に尋ねます。「何が楽しいですか」（複数回答可）（日本）

全体 185 人	男子 105 人	女子 80 人
1, 友人と遊ぶ 114 (61.6)	1, 友人と遊ぶ 53 (50.5)	1, 友人と遊ぶ 61 (76.2)
3, クラブ 34 (18.4)	2, クラブ 23 (21.9)	2, クラブ 11 (13.8)
4, 休み時間 9 (4.9)	3, 休み時間 4 (3.8)	3, 休み時間 5 (6.3)
授業 9 (4.9)	授業 4 (3.8)	授業 5 (6.3)
5, 行事 4 (2.2)	4, クラスが楽しい 3 (2.8)	4, 先生と話す 3 (3.8)
6, クラスが楽しい 3 (1.6)	5, 自由なところ 2 (1.9)	5, 行事 2 (2.5)
7, 自由なところ 2 (1.1)	行事 2 (1.9)	

（注）（ ）内の数字は上記の質問に「はい」を選択した生徒に対する割合である。

①「はい」と答えた人に尋ねます、「何が楽しいですか」（複数回答可）
（ニュージーランド）

男子 9 人	女子 17 人
1, クラブ 5 (55.6)	1, 友人 11 (64.7)
2, 友人 3 (33.3)	2, 昼食 3 (17.6)
3, 芸術の授業がない 1 (11.1)	3, 先生 1 (5.9)
勉強以外どんなことでも 1 (11.1)	クラブ 1 (5.9)
売店が近いので 1 (11.1)	学校の社会性 1 (5.9)
とてもおもしろい 1 (11.1)	芸術の授業 1 (5.9)

②「いいえ」と答えた人に尋ねます。「どうすれば楽しくなりますか」（複数回答可）
（日本）

男子 50 人	女子 27 人
1, 自由にする 7 (14)	1, 友人をつくる 7 (25.9)
2, 学校がおもしろくない 6 (12)	2, 勉強とは別の楽しみを作る 5 (18.5)
3, 勉強とは別の楽しみを作る 5 (10)	3, 自分自身に問題がある 4 (14.8)
わからない 5 (10)	4, 学校の制度を変える 3 (11.1)
4, 友人をつくる 3 (6)	5, 自由にする 2 (7.4)
5, 宿題が多い 2 (4)	6, 行事を増やす 1 (3.7)
学校の制度を変える 2 (4)	時間の無駄 1 (3.7)
自分自身に問題がある 2 (4)	いやなことは早く終わらせる 1 (3.7)
6, クラス替え 1 (2)	
ならない 1 (2)	

（注）（ ）内の数字は上記の質問に「いいえ」と答えた生徒に対する割合である。

高校生の学校生活に関する意識調査（林）

②「いいえ」と答えた人に尋ねます、「どうすれば楽しくなりますか」（複数回答可）
（ニュージーランド）

男子 12 人	女子 7 人
1, 制限をなくして, 自由にする 4 (33.3) (生徒に責任を持たせる)	1, おもしろい授業 2 (28.6) キャンプ等の課外授業をふやす 2 (28.6)
2, 授業をなくす 3 (25.0)	2, 以前の学校の友人と一緒にいたい 1 (14.3)
3, 女子生徒がいてほしい 2 (16.7)	よい友人がほしい 1 (14.3)
4, 学校をおもしろくする 1 (8.3)	おもしろくなるような何かがあれば 1 (14.3)
もっと芸術の時間があればよい 1 (8.3)	自由 1 (14.3)
授業にビデオを活用する 1 (8.3)	通信教育にする 1 (14.3)
授業時間を選択制にしてほしい 1 (8.3)	テストがない 1 (14.3)
わからない 1 (8.3)	もっとすてきな先生がいてほしい 1 (14.3)
	男子生徒がいてほしい 1 (14.3)

(b) どの時期が楽しかったか

「小, 中, 高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか」という質問に対しては, 小, 中, 高のいずれかを回答してもらい, 「どうしてか」という質問に対しては, それを選んだ理由を記述式で回答してもらった。

《小, 中, 高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか。》

質問 2 「小・中・高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか」
（日本）

	合 計	男 子	女 子
小	46 (17.0)	29 (18.2)	17 (15.3)
中	130 (48.1)	77 (48.4)	53 (47.7)
高	88 (32.6)	48 (30.2)	40 (36.0)
無回答	6 (2.2)	5 (3.1)	1 (0.9)

質問 2 「小・中・高ではどの時代が一番楽しかったと思いますか」
（ニュージーランド）

	全 体	男 子	女 子
小	18 (40.0)	9 (42.9)	9 (37.5)
中	8 (17.8)	2 (9.5)	6 (25.0)
高	19 (42.2)	10 (47.6)	9 (37.5)

日本では、「中学校時代」が最も多く、次いで「高校時代」、「小学校時代」と続いている。それに対してニュージーランドでは、「高校時代」が最も多く、次いで「小学校時代」、「中学校時代」という相反する興味深い結果となっている。筆者は、日本での調査を実施する前に、＜高校時代、小学校時代、中学校時代という順になるのではないかと＞という予想を立てていた、その理由として＜中学校時代は高校受験が目前にあり、内申書等のプレッシャーで楽しめないのではないかと、それに比べて高校時代はその受験というハードルを見事にクリアしたので、自由に学校生活を楽しめるのではないかと＞と考えたからである。結果としては、日本の調査結果では、筆者とは逆の結果になり、ニュージーランドの結果では筆者の予想通りになった。その原因を次の質問の回答を見ながら考えていこうと思う。

《どうしてか》

両国とも「小学校時代」に関しては、「自由があり、気楽だった」がその理由に挙げられているが、どちらも小学校の時は受験等を意識せずに伸び伸びとした学校生活を送ることができたのであろうと推察できる。ここで、数はわずかではあるが、両国の違いということで特筆すべき点としては、ニュージーランドでは「宿題がない」ということを挙げていることである。小学校1年生から宿題が課せられている日本の小学生からすれば、うらやましい限りであろう。

「中学校時代」に関しては、日本では「友人がいたから」「いろいろなことができたから」「高校ほど勉強しなくてもよかったから」をその理由に挙げており、一方、ニュージーランドでは「勉強しなくてよかった」「ただ、テストのための勉強をする以上のおもしろいものがあった」というのを極く少人数ではあるが、その理由に挙げている。

次に「高校時代」を見ていくと日本では中学校時代に挙げた理由とあまり違いがないのに対して、ニュージーランドでは、「自由に学べる」「興味あるものが学べる」等の意見が見られる。ここから、筆者なりに、日本とニュージーランドの中学、高校時代の特徴を挙げると次のようになるのではないだろうか。日本では、2章でも述べてきたように高校受験よりも大学受験の方がはるかに厳しく、その結果、高校生も受験を意識せざるを得なくなり、高校で自

高校生の学校生活に関する意識調査（林）

①「どうしてか」（複数回答可）（日本）

「小学校時代」

男子 29 人		女子 17 人	
1, 気楽で自由だった	6 (20.7)	1, 気楽で自由だった	13 (76.5)
遊べて楽しかった	6 (20.7)	2, 一生懸命やれば評価してもらえた	1 (5.9)
2, 勉強しなくてよかった	5 (17.2)	いろいろな行事があったから	1 (5.9)
3, テストを真剣に考えなくてもよかった	1 (3.4)	心から笑えた	1 (5.9)

（注）（ ）内の数字は上記の質問に「小学校」と回答した生徒に対する割合である、以下中学校、高校においても同様である。

「中学校」

男子 77 人		女子 53 人	
1, 友人がいたから	19 (24.7)	1, 友人がいたから	22 (41.5)
2, 楽しかったから	10 (13.0)	2, いろいろなことができたから	10 (18.9)
いろいろなことができたから	10 (13.0)	3, クラブ活動	6 (11.3)
3, 高校程勉強しなくてよかった	5 (6.5)	4, 自由だったから	4 (7.5)
5, 行事があったから	3 (3.9)	5, よい先生がいたから	2 (3.8)
6, 停学や留年がないから	2 (2.6)	6, クラス単位でまとまりがあったから	1 (1.9)
7, 自由だったから	1 (1.3)	学校に行くのが楽しみだった	1 (1.9)
人と自然につき合えたから	1 (1.3)	クラスが好きだった	1 (1.9)
よい先生がいたから	1 (1.3)		

「高校」

男子 48 人		女子 40 人	
1, 自由があり、いろいろできた	18 (37.5)	1, 友人がいたから	16 (40)
2, 友人がいたから	7 (14.6)	2, 自由があり、いろいろできた	9 (22.5)
3, 充実している	5 (10.4)	3, 充実している	6 (15)
クラブ活動	5 (10.4)	4, アルバイトができる	1 (2.5)
4, 楽だから	2 (4.2)	言いたいことが言えるようになった	1 (2.5)
5, アルバイトができる	1 (2.1)	世界が広がった	1 (2.5)
大人として認められる	1 (2.1)		
いろいろな資格が取れる	1 (2.1)		

由に興味あるものを学ぶということとはできないのに対し、ニュージーランドでは Bursary Examination と呼ばれる大学入試のための試験が Form 7 で実施され、そのプレッシャーもあるかもしれないが、「自由がある」「自由に学べる」

①「どうしてか」(複数回答可) (ニュージーランド)

「小学校」

男子 9 人	女子 9 人
1, 自由があった 3 (33.3)	1, 気楽だった 4 (44.4)
成績に関するプレッシャーがなかった 3 (33.3)	2, 友人がいた 2 (22.2)
2, 宿題がなかった 2 (22.2)	勉強しなくてもよかった 2 (22.2)
3, 勉強しなくてもよかったから 1 (11.1)	テストが簡単だった 2 (22.2)
女子生徒がいたから 1 (11.1)	3, 自由にいろいろ学べた 1 (11.1)
	宿題があまりなかった 1 (11.1)
	よい先生がいた 1 (11.1)

「中学校」

男子 2 人	女子 6 人
1, テストなど心配しなくてよかった 1 (50)	1, 勉強しなくてよかった 3 (50)
宿題があまりなかった 1 (50)	2, 授業がやさしくて、わかりやすかった 1 (16.6)
	何もかも新しく、魅力的だった 1 (16.6)
	ただ、テストのための勉強を 1 (16.6)
	する以上のおもしろいものがあった

「高校」

男子 10 人	女子 9 人
1, 自由に学べる 4 (40)	1, よい友人がいる 3 (33.3)
2, 宿題等が多くない 2 (20)	2, 興味があるものを学べる 2 (22.2)
おもしろい 2 (20)	よい先生がいる 2 (22.2)
3, クラブ活動 1 (10)	自由がある 2 (22.2)
高校生になったので、責任を持たされ、1 (10)	3, いろいろな意見や機会があり、おもしろい 1 (11.1)
大人として扱われる	あまり勉強しなくてよい 1 (11.1)
年が上だから 1 (10)	私は賢いから 1 (11.1)
厳しくないから 1 (10)	学校に影響力がある 1 (11.1)
	自分自身のアイデンティティを 1 (11.1)
	持ち始めるから

「興味あるものが学べる」といった意見に見られるように高校で自由に興味のあるものを学び、また活動することができるのであろうし、学校もその要望に答えているのであろう。また、日本では逆に中学校の方が校則等は厳しいかもしれないが、小学校からの同級生と同じ学校に進学することが多く、友人にも

恵まれ、楽しい学校生活を送れたのではないだろうか。

(c) 先生との信頼関係について

「今までに信頼できる先生がいましたか」という質問について、「はい」「いいえ」で回答してもらい、「はい」と回答した生徒に関しては、さらに「いつの時代か」「どういう点が信頼できたか」を記述式で回答してもらった。

《今までに信頼できる先生がいましたか》

結果はニュージーランドの生徒の方が日本の生徒より、信頼度が高いことがわかった、男女別で見ると、ニュージーランドでは男女共「はい」が上回っており、特に女子では8割近い生徒が「はい」と回答しており、教師との間に深い信頼関係があることがうかがわれる。これに対して日本では、女子は約7割とやはり、同様の深い信頼関係で結ばれていることがうかがわれるが、男子は「はい」が「いいえ」を上回っているものの、過半数には達していないことがわかる。今後、その原因を探っていく必要があるだろう。

《いつの時代か》

結果は（b）の「小、中、高ではどの時代が一番楽しかったですか」に対する回答がそのままここでも反映され、日本では「中学校時代」、ニュージーランドでは「高校時代」と答えた生徒が多かった。

質問3「今までに信頼できる先生がいましたか」（日本）

	全 体	男 子	女 子
は い	149 (55.2)	75 (47.2)	74 (66.7)
いいえ	105 (38.9)	73 (45.9)	32 (28.9)
無回答	16 (5.9)	11 (6.9)	5 (4.5)

質問3「今までに信頼できる先生がいましたか」（ニュージーランド）

	全 体	男 子	女 子
は い	30 (66.7)	11 (52.4)	19 (79.2)
いいえ	15 (33.3)	10 (47.6)	5 (20.8)

①「いつの時代か」(複数回答可)(日本)

	全体 149 人	男子 75 人	女子 74 人
小	39 (26.2)	21 (28)	18 (24.3)
中	87 (58.4)	45 (60)	42 (56.8)
高	38 (25.2)	20 (26.7)	18 (24.3)

(注) () 内の数字は上記の質問に「はい」と答えた生徒に対する割合を示している。

①「いつの時代か」(複数回答可)(ニュージーランド)

	全体 30 人	男子 11 人	女子 19 人
小	14 (46.7)	6 (54.5)	8 (42.1)
中	9 (30.0)	3 (27.3)	6 (31.6)
高	15 (50.0)	7 (63.6)	8 (42.1)

《どういう点が信頼できたか》

日本では、信頼できる先生像として「何でも話せ、相談に乗ってくれ、頼りがいのある」先生像が浮かび上がってくるが、一方では「教えるのが上手」といった教え方の技術も必要になってくる。ニュージーランドでもやはり、「生徒と一緒にやる人」「すてきで信頼できる人」といった教師の人柄、姿勢といったものに重きを置いていることがわかる。このように両国とも「信頼できる先生」についての意識はほぼ同じであると言える。

②「どういう点が信頼できたか」(日本)

「小学校」

男子 21 人		女子 18 人	
1, 何でも話せた	4 (19.0)	1, 何でも話せた	4 (22.2)
親身になって考えてくれた	4 (19.0)	2, 一緒に泣いてくれた	2 (11.1)
2, 先生が偉大だった	2 (9.5)	一緒に遊んでくれた	2 (11.1)
3, 厳しさの中にやさしさがあつた	1 (4.8)	3, 厳しさの中にやさしさがあつた	1 (5.6)
人は同じだと教えてくれた	1 (4.8)	人間として見てくれた	1 (5.6)

(注) () 内の数字は上記の質問に「小学校」と回答した生徒に対する割合を示している。以下中学校、高校も同様である。

高校生の学校生活に関する意識調査（林）

「中学校」

男子 45 人	女子 42 人
1, 何でも話せた (いろいろわかってくれた) 9 (20.0)	1, 同じ立場で物事を考えてくれた 7 (16.7)
2, 相談に乗ってくれた 6 (13.3)	2, 相談に乗ってくれた 6 (14.3)
3, 頼りがいのある先生だった 4 (8.9)	3, 何でも話せた (いろいろわかってくれた) 5 (11.9)
熱心に教えてくれた 4 (8.9)	4, やさしくよい先生だった 2 (4.8)
4, 最後まで進路を考えてくれた 3 (6.7)	クラブの先生だったから 2 (4.8)
5, 一言一言に筋が通っている 1 (2.2)	何事にも真剣だったから 2 (4.8)
金八先生のような先生だから 1 (2.2)	5, 先生が好きだった 1 (2.4)
気が合ったから 1 (2.2)	わかりやすく教えてくれた 1 (2.4)
生徒の立場に立ってくれた 1 (2.2)	善悪を決めるやり方がユニークだった 1 (2.4)

「高校」

男子 20 人	女子 18 人
1, 何でも話せた (いろいろわかってくれた) 7 (35)	1, 相談に乗ってくれる 5 (27.8)
2, 相談に乗ってくれる 3 (15)	2, 何でも話せた (いろいろわかってくれた) 3 (16.7)
3, 信頼できる 2 (10)	3, 答えたくない 2 (11.1)
教えるのが上手 2 (10)	4, 生徒の考えを重視し,自由な授業をしてくれた 1 (5.6)
4, 一生懸命してくれる 1 (5)	いろいろなことを知っている 1 (5.6)
先生と一番よく接するから 1 (5)	

②「どういう点が信頼できたか」（複数回答可）（ニュージーランド）

「小学校」

男子 6 人	女子 8 人
尊敬している 1 (16.6)	1, 若くて,私達を理解しようとしてくれ 2 (25.0)
とてもすてきな先生 1 (16.6)	るし,学校で私達を見守ってくれる
冷静で穏やかな人 1 (16.6)	2, 皆は何に興味を持っているのか聞いてくれる 1 (12.5)
若くて, 友人のように接してくれる 1 (16.6)	やさしい 1 (12.5)
	信頼できる 1 (12.5)
	尊敬できる 1 (12.5)
	大人のように扱ってくれて, 1 (12.5)
	話を聞いてくれる

「中学校」

男子3人		女子3人	
いろいろと援助してくれる	1 (33.3)	やさしい	1 (16.7)
生徒と一緒にやる人	1 (33.3)	心が広く話しやすい	1 (16.7)
		すてきな先生	1 (16.7)
		私達を見守ってくれる	1 (16.7)
		私を好んでくれて、信頼してくれ、	1 (16.7)
		友人のような先生	

「高校」

男子7人		女子8人	
1, 信頼できる	2 (28.6)	1, 信頼できる	2 (25.0)
2, 冷静で穏やか	1 (14.3)	2, 私達を見守ってくれる	1 (12.5)
丁寧で話しやすい	1 (14.3)	すてきで愉快的先生	1 (12.5)
私達の立場で考えてくれる	1 (14.3)	私達を理解しようとしてくれる	1 (12.5)
		生徒を尊重してくれ、	1 (12.5)
		私達も信頼できる	

(d) 学校に行きたくないと思ったことがあるか。

「学校に行きたくないと思ったことがありますか」という質問項目に対して、「はい」「いいえ」で回答してもらい、さらに「はい」と回答した生徒に対して「いつ頃か」また、「何が原因か」について記述式で回答してもらった。

《学校に行きたくないと思ったことがありますか》

両国とも半数以上が「はい」と回答している。詳しく見ていくと、日本では6割が「はい」と答えたのに対し、ニュージーランドでは8割以上の生徒が「はい」と回答している。次ぎに両国を男女別に見るとニュージーランドではどちらも8割を超えているのに対し、日本では男子は5割に達していないが、一方女子は8割以上が「はい」と回答している。両国とも女子で「学校に行きたくないと思った」割合が高いことが特徴と言える。両国とも女子の割合が高いことに対する共通の理由があるのか次で考えていきたい。

《いつ頃か》

この質問項目に対する回答は多岐に渡っており、いかにさまざまな時期に生

高校生の学校生活に関する意識調査（林）

質問4「学校に行きたくないと思ったことがありますか」

（日本）

	全 体	男 子	女 子
は い	157 (58.1)	75 (47.2)	82 (73.9)
いいえ	97 (35.9)	72 (45.7)	25 (22.5)
無回答	16 (5.9)	12 (7.5)	4 (3.6)

質問4「今までに学校に行きたくないと思ったことがありますか」

（ニュージーランド）

	全 体	男 子	女 子
は い	39 (86.7)	17 (81)	22 (91.7)
いいえ	6 (13.3)	4 (19)	2 (8.3)

①「いつ頃か」（日本）

全体 157 人		男子 75 人		女子 82 人	
1, 高校の頃	30 (19.1)	1, 高校の頃	17 (22.7)	1, 中学校の頃	15 (18.3)
2, いつも	27 (17.2)	2, いつも	13 (17.3)	2, いつも	14 (17.1)
中学の頃	27 (17.2)	3, 中学の頃	12 (16.0)	3, 高校の頃	13 (15.9)
3, 雨の日	6 (3.8)	4, 雨の日	4 (5.3)	4, 眠い時	4 (4.9)
4, 眠い時	4 (2.5)	5, 小学校の頃	3 (4.0)	5, 時々	3 (3.7)
小学校の頃	4 (2.5)	疲れた時	3 (4.0)	6, 月曜日	2 (2.4)
疲れた時	4 (2.5)	6, 休みの後	2 (2.7)	雨の日	2 (2.4)
5, 時々	3 (1.9)	入学当初	2 (2.7)	朝	2 (2.4)
6, 月曜日	2 (1.3)	7, 夏	1 (1.3)	7, 暑い時	1 (1.2)
朝	2 (1.3)	眠い時	1 (1.3)	疲れた時	1 (1.2)
休みの後	2 (1.3)	朝練に行き始めてから	1 (1.3)	土曜日	1 (1.2)
入学当初	2 (1.3)			冬	1 (1.2)
				小学校の頃	1 (1.2)
				学校がおもしろくない時	1 (1.2)

（注）（ ）内の数字は上記の質問に「はい」を選択した生徒に対する割合を示している

徒が「学校に行きたくないと思っているのか」が浮き彫りにされており、興味深い回答ではないかと思われる。その中で特徴を見つけだすことは難しいが、その中でも特に日本では男女共時期としては高校、中学校の頃が多く見られ、一方、ニュージーランドでは時期としては、女子では中学校、小学校が多く見

①「いつ頃か」(複数回答可)(ニュージーランド)

全体 39 人	男子 17 人	女子 22 人
1, 毎日 9 (23.1) 宿題(課題)が多い時 6 (15.4)	1, 毎日 5 (29.4) 2, 宿題(課題)が多い時 3 (17.6)	1, 中学校時代 5 (22.7) 2, 小学校時代 4 (18.2)
2, 中学校時代 5 (12.8)	3, 高校時代 2 (11.8)	毎日 4 (18.2)
3, 小学校時代 4 (10.3) 高校時代 4 (10.3)	病気の時 2 (11.8) 学校がいやになった時 2 (11.8)	3, 宿題(課題)が多い時 3 (13.6) 難しいテストがある時 3 (13.6)
4, 難しいテストがある時 3 (7.7)	4, 今 1 (5.9)	4, 高校時代 2 (9.1)
5, 病気の時 2 (5.1) 学校がいやになった時 2 (5.1) 朝寒くて起きれない時 2 (5.1)	年 2, 3 回 1 (5.9) 疲れた時 1 (5.9) ストレスのたまった時 1 (5.9) 前日に誰かとけんかした時 1 (5.9)	朝寒くて起きれない時 2 (9.1) 5, たびたび 1 (4.5) 1 学期 1 (4.5) 3 学期 1 (4.5) 今年 1 (4.5) 眠たい時 1 (4.5) トーナメントで疲れた時 1 (4.5) 数学の授業が 2 時間ある時 1 (4.5)
6, 今 1 (2.6) 年 2, 3 回 1 (2.6) 疲れた時 1 (2.6) たびたび 1 (2.6) 1 学期 1 (2.6) 3 学期 1 (2.6) 眠い時 1 (2.6) 今年 1 (2.6) ストレスのたまった時 1 (2.6) 前日に誰かとけんかした時 1 (2.6) トーナメントで疲れた時 1 (2.6) 数学の授業が 2 時間ある時 1 (2.6)		

られる。これは質問項目 (b) で「楽しかった時代」として小学校時代を挙げた生徒が少なかったこととも関連するのであろう。また、ニュージーランドの男子で見られる「宿題(課題)が多い時」「ストレスがたまった時」、同女子の「学期の途中で宿題(課題)が多くあり、行くのがいやになった時」「難しいテストがある時」等の回答を見ていくとニュージーランドの高校生も日本の高校生と同様に厳しい状況に直面していることがうかがわれる。両国の回答で気になる点としては「疲れた時」という回答が見られることである。ただ、単に肉体が疲労しただけであれば、十分な休息をとれば、元氣も回復するであろうが、学校生活について、精神的に疲れきってしまった状況にあるのであれば、早急に何らかの対策を講じなければならないであろう。筆者として、さらに詳しく回答を求めたい点である。

《何が原因か》

両国で共通して見られる大きな原因としては「学校がおもしろくない（退屈だから）」である。＜学校がおもしろくないから、学校に行きたくない＞と思うのは当然のことであろう。なぜ学校がおもしろくないのかについては、さまざまな理由があるだろうが、上記で見られた「宿題（課題）が多すぎる」ことも原因するかもしれない。漠然とした難しい問題ではあるが、この問題の解決なしには、生徒はいつも＜学校に行きたくないと思うであろう＞し、それが不登校につながっていく可能性もあるだろう。早急に着手されなければならない問題であろう。

次に上記でも述べたが「疲れたから」が両国ともかなりの数で見られることである。この原因の究明も必要とされるところであろう。次に日本で見られる特徴としては、女子で「友人関係がくずれた時」が多数見られることである。これは（a）で「学校生活が充実していて楽しい」原因として、多くの生徒が「友人と遊ぶ」を挙げていることから考え、「友人関係がくずれてしまえ

②「何が原因か」（日本）

男子 75 人		女子 82 人	
1, 学校がおもしろくない	8 (10.7)	1, 学校がおもしろくない	11 (13.4)
2, 朝起きるのがつらい	7 (9.3)	友人関係がくずれた時	11 (13.4)
2, じゃまくさくなる時がある	7 (9.3)	朝起きるのがつらい (朝寝坊した)	11 (13.4)
3, だるく疲れるから	6 (8.0)	2, だるく疲れるから	8 (9.8)
友人関係がくずれた時	6 (8.0)	3, クラブが原因	5 (6.1)
4, 学校に問題がある(クラスがうるさい, 厳しい等)	3 (4.0)	4, 学校に行く意義が見いだせない	3 (3.7)
5, 雨の時濡れるのがいや	2 (2.7)	5, 勉強がついていけない	1 (1.2)
6, いじめられた	1 (1.3)	お弁当がいや	1 (1.2)
中学校の模試がいや	1 (1.3)	注射や持久走の時	1 (1.2)
クラブが原因	1 (1.3)	一つ一つ覚えていない	1 (1.2)
いろいろな問題を抱えているから	1 (1.3)	クラスが変わると最初はおもしろくない	1 (1.2)
		休みがないから	1 (1.2)
		雨の日は行きたくない	1 (1.2)
		前日が休日だから	1 (1.2)
		答えたくない	1 (1.2)

(注) () 内の数字は上記の質問に「はい」を選択した生徒に対する割合を示している

②「何が原因か」(複数回答可) (ニュージーランド)

男子 17 人		女子 22 人	
1, 学校が退屈だから	6 (35.3)	1, 疲れたから	4 (18.2)
2, 疲れたから	3 (17.6)	学校が退屈だから	4 (18.2)
宿題が多すぎる	3 (17.6)	2, テストのため	3 (13.6)
3, 眠たいから	2 (11.8)	3, 寝ていたいから	2 (9.1)
4, 学校が厳しいから	1 (5.9)	4, 学校がいやだから	1 (4.5)
学校がいやだから	1 (5.9)	ストレスがたまるから	1 (4.5)
行きたくない日が毎日続くから	1 (5.9)	言い争いをした時	1 (4.5)
学校に耐えられないから	1 (5.9)	先生とクラスがいやだったから	1 (4.5)
気分がよくないから	1 (5.9)	寒いから	1 (4.5)
		学校よりもおもしろいものがあるから	1 (4.5)
		前夜外出して疲れた	1 (4.5)
		sports day のため	1 (4.5)
		友人の問題	1 (4.5)
		学校に対する興味がなくなった	1 (4.5)
		先生が非理性的だから	1 (4.5)
		生徒がいやだから	1 (4.5)
		宿題をしていなかったため	1 (4.5)

ば、学校に行きたくない」と考えるのも当然であろう。友人が学校を支えている日本の現状に対する問題提起とも言えるであろう。次ぎに見られる特徴としては「クラブ活動」がその原因に挙げられていることである。課外活動の一つとして、「学校生活を楽しむ」筈の「クラブ活動」が「学校に行きたくない」大きな原因の一つになっていることに驚かざるを得ない。休日も休まずに行う日本式クラブ活動のあり方を今一度考えて見る必要があるのではないだろうか。

(参考)「ニュージーランドの教育制度」

3 歳から幼稚園が始まり、5 歳の誕生日に小学校に入学する。小学校は 6-7 年制であり、intermediate school (Forms 1, 2) が 11 歳の時に始まる。secondary school (Forms 3 to 7) は 13 歳より始まり、Form 5, 6, 7 が日本の高校に相当する。新学期は 2 月に始まり、12 月中旬に終わる。Form 5 (15 歳)で、School Certificate と呼ばれる最初の共通テストを受け、その結果で Form 6

に進級できる。Form 7（17 歳）で、The scholarship and Bursary Examination と呼ばれる、大学入学のための試験を受ける。大学は 7 つある。その他コミュニティーカレッジに相当するポリテクニクスがあり、20 歳代や 30 歳代の成人の生徒の割合が高いのが特徴である。

終 わ り に

今回は学校生活及び学校に対する意識を中心に日本とニュージーランドの高校生について考察した。この調査を通して中学生、高校生は受験に追われ、友人と遊んだり、自己についていろいろ考え、悩む時間的な余裕がないように感じられた。これは、人生が 80 年代になっているにも関わらず、学校教育は従来のものであり、乳幼児期から青年期に至る 80 年と言われるライフスパンの 4 分の 1 にも満たない短い期間に様々な能力を身につけなければならないところに問題があるのではないだろうか。人生 80 年という生涯教育の観点から、もう少しゆったりとした流れの中で能力を身につけていくことができれば、もっと生徒は楽になるのではないだろうか。

そこで筆者は、人生を 80 年以上という長いライフスパンで教育を考え、理想的にはこの期間は試験を一切排除し、高校を全入制にし、大学入試を廃止し、希望者は全員入学できるようにし、学歴による賃金格差等を排除し、学歴偏重の現状を打破すべきであると考え。そうして、この時期に自我同一性を確立できるようにすべきであると考え。そうすれば、ある高校生の意見に見られる「どこの高校に入るかで将来が見えてしまう」ということもなくなっていくのではないだろうか。しかし現実はいかにとほど遠い。そこで筆者としては、この理想を少しでも実現するために現行制度の中でできることから努力していきたいと考える。

注

- 1) 長尾 博『ケース青年心理学』有斐閣、1991 年、p. 8
- 2) 上掲長尾 p. 8

参考文献

讀賣新聞 1995 年 8 月 11 日号

『SECONDARY EDUCATION IN NEW ZEALAND』NEW ZEALAND EDUCATION INTERNATIONAL LTD 1992 年

（はやし たかお 大阪府立磯島高校）（1995 年 10 月 25 日受理）